

第14回 開発学を学ぶということ

はじめまして、現在 University of East Anglia にて、Undergraduate 2年生として Development Studies を勉強しております中嶋 梨津子です。お会いしたことはありませんが、第11回を担当された桑垣さんと同じ大学ですので、大学の詳細は簡単にさせていただきます。大学はNorwichという町で、Bathなどの町よりは遥かに大きい所だと思います。学内には美術館・湖・機能が揃った Sports Park（プール・ジム・競技用トラック）があり、勉強の息抜きにいいですね。

私が、在籍しているコース・Development Studies では、社会・文化・経済・ジェンダー・宗教・歴史・・・と様々な側面から、発展途上国における開発アプローチ、問題点、成り立ちを講義・セミナー等で学び、講義で学んだ基礎的知識を、生徒一人一人が広げていくという、勉強はあくまでも個人の問題であることが伺える、そういうコースだと思っています。当たり前のことかもしれませんが、開発学を学ぶということ自体、「答え」はない学問であり、常に疑問が生まれ、その疑問を様々な角度から紐解き、自分なりのアイデアまたは、次の問題を考えることができる道を見つけていくことに意味がある、そんな学問ではないかと思っています。

私が開発学を学ぶ前は、世界の出来事に関心はあったものの、国と国との結びつき、経済関係、今までどんなところでどんな経緯で戦争がおこったのか？どうして貧困は起きて、そしてなくなるのだろうか？など、細かい点などは考えたこともありませんでした。そんな私が一つの番組を見て、興味を持ち出しのがきっかけで、今現在こうして開発学を勉強していると思っています。2～3年前だったと思いますが、NHKドキュメンタリー番組にて、コンゴ共和国での紛争を取り上げていて、その内容に衝撃を受け、考えるきっかけになったと思います。その内容を簡単に説明します。

経済大国といわれる国に住む人達にとって、携帯電話はここ何年かの間で急速に普及され、瞬く間に生活必需品？といわれる程になったと思います。日本国内でいえば、写真付、最近ではビデオもとれて、形も益々薄く、軽いものへと進化しました。ただ、この携帯電話とコンゴ共和国内での紛争がどう関係しているのかというと、現在の薄型携帯を生み出した“タンタル”という鉱石が関わっているからです。この鉱石によって、細かい機械同士の電子操作がスムーズになり、余計な部品がいなくなった為、携帯電話をより薄型に改良できたのだと、番組では紹介していました。その、鉱石が大量に摂取できる土地がコンゴ共和国ということで、先進国はこぞって、そのタンタルの売買に力を注ぎ、これにより、コンゴ共和国内の一部の有力な企業家や軍隊がその利益をより多く取ろうと、関所なるものを鉱山から町までの間に何区間か設置して、鉱夫から通行料として、大量のタンタルを押し取るという事態に。その結果、

多くの鉱夫に入る利益はわずかなものになり、さらに、希少価値であるタンタル摂取の為、鉱夫も引き込んだ軍隊による、土地とり合戦、紛争へと発展して言ったと紹介されていました。

私がここで感じたこと、述べたいことは、片方の国では、携帯電話を手にし、娯楽・便利を追及し、一方では、他国の娯楽・便宜の為の部品摂取 = お金を得る為、紛争を起こし、多くの人が苦しい生活を送っているという、同じ地球という惑星に存在する世界とは思えがたい現状を、はたしてどれ位の人が知っていて、関心を示しているかということです。恥ずかしいことに、私も今まではそうであったように、きっと今だに、多くの人がこの現状を知らない、しったとしても、どう関係があるのかを考える機会がないのではないのでしょうか。幸運にも、私はこの NHK の番組を通し知る機会を得て、現在イギリスで学ぶことにより、他国の人に会うことも含め、身をもって経験し、今起きているであろうことに“気づくこと”はできていると思います。

開発学を学ぶにあたって、学び始めの頃は、漠然と、講義で先生が述べていることを鵜呑みにしたり、本を読んで得たことに疑問をもったりの連続でした。今もなおその疑問点は減ることはありませんが、最近違った見解を持ち出したので、その点に触れてみたいと思います。

世の中には、色んな人が作った理論・定義・考え等が錯乱しているように思えます。その中で、どれが事実かを探し出すのは、普通の人にとってはとても困難なことであると同時に、あまりにも、色々な情報が流れすぎて、頭の中がパンク寸前なので、だったら、いっそのこと、関心事を減らし、もっと簡単なことに目を向けた方が生き易い！そう考えている人が多いのではないのでしょうか？そこで、今、私が持つ開発学への見方は両極端の意見を見ること。答えはない！そうだとしたら、どうやってその問題に目を向ければよいのか？どういう視点から、その背中合わせに対立している様々なセオリーを理解していくか？ということです。

皆様ご存知、経済学者のジョセフ・E・スティグリッツ氏(Joseph E. Stiglitz) によると、“一日一ドル以下の貧困層の人数は1985年で15億、2005年には、20億人と予測。この原因は経済のグローバル化による貧困の格差が開いたことによるもの。貧困層はグローバル経済が進むとより貧困になる。例えば、アルゼンチンが、経済の急速な立ち上げを考え、IMF に借金を申し入れた。それにより、IMF 側は条件を突きつける。市場開放、規制撤廃、民営化。しかし、競争力のある海外製品に国内品は売れなくなり、倒産が増える。これを政府が補助しようとしたが、財政を圧迫し、財政支出のバランスをとる為、福祉を切り捨てる。市場競争力に全てを任せるとするのは、先進国の都合のいい理論である。IMF の基本は市場原理主義で、神の見えざる手を前提とするが、現実には情報も富みも全ての人には行

き渡らない。”と述べています。ほんの少し前の私は、これを見て、ほ～やっぱりそうか！グローバル化はよくないことなんだな！先進国のしていることは恥ずかしいことかもしれない。なんとかしなくては？なんて思っていました。これに対し、私が見つけたことは、ジャグディッシュ・バラワティ氏の(Bhagwati, Jagdish) “そもそも資本の流れの自由化が皆にメリットをもたらすという考えそのものが「神話」にすぎず、資本の移動には本質的リスクが伴うと指摘した上で、このリスクを軽視して「金融市場」を広げること躍起になったのがウォール街、財務省、IMF、世界銀行に存在するネットワーク、つまり、「ウォール

街=財務省複合体」である”という大胆な批判であり、こちらは、皆に恩恵が行き渡っていないのが問題であって、グローバル化は悪くないというもの。とても興味深いものだと思います。

ここで分かることは、どちらが正しい、正しくないかではなく、この2点を踏まえて、新しい道はないのだろうか？ということだと思います。問題点を上げるのはもう、賢い方達がこれでもかと討論してきたと思います。だとしたら、これからは、開発学という学問を、もっと、実践的な道を見つけ出せる学問へと発展していくことが求められる時期にきたのではないのでしょうか？医者として、健康を見てあげられる、優れたテクノロジーによって、農村開発を発展させていく、経済学者として、金銭的な計画を立ててあげる、方法は様々ありますが、それでも、何ができるのか？と疑問を持っています。これは、きっと、問題点・解決点ばかりに目をおき、実践的にそれじゃあ、何が今必要なのか？という点が非常にかけている為、私を含め、皆情報の渦に飲み込まれてしまっているんだと思います。溢れかえる情報を吟味し、今、何を求められているのかを常に考え、新しい考えを生み出せる学問へと開発学はより一層進歩していけるといいのではないかと思います。

今回、このようにコラムとして、自分の意見を掲載させて頂きましたが、まだまだ知識も足りず、言いたいことが皆様にどれ位届いているのかどうか…何か疑問点など見つけた方は、ぜひ、指摘していただきたいと思います。

2004年4月4日

University of East Anglia 中嶋梨津子